



報道発表資料の配付日時 12月1日(火) 17時30分

発表項目 (行事名)	高病原性鳥インフルエンザ発生防止に係る消毒強化キャンペーンの実施について		
記者レクチャー のお知らせ	(実施日時)	発表者	
		発表場所	
概要	<p>現在、国内で高病原性鳥インフルエンザなどの発生が続いており、道内でこれがひとたび発生すれば、本道経済に大きな影響を及ぼすことから、その侵入防止は極めて重要です。</p> <p>このため、本日から来年5月までの渡り鳥の飛来する期間、養鶏場等を対象に、本疾病の侵入防止を目的とした「消毒強化キャンペーン」を実施します。</p> <p>本キャンペーンの周知については、北海道養鶏会議及び道内生産者団体を通じて、養鶏農家等へ周知します。</p> <p>道としては、国の緊急提言も踏まえ、養鶏場への小型野生動物の侵入防止など、飼養衛生管理の徹底を繰り返し指導するとともに、国や市町村、関係団体等と連携し、全道一丸での侵入防止に万全を期してまいります。</p> <p>(別紙1)【周知資料】全集中 予防の呼吸 ～消毒強化キャンペーン～ ○ 壺の型 消毒 (消石灰を撒け) ○ 式の型 侵入防止 (穴をふさげ)</p> <p>(別紙2) 国からの緊急提言 (令和2年11月24日付家畜衛生部会家きん疾病小委員会)</p>		
参考			
報道(取材)に当たってのお願い	本取組について、養鶏関連業界に広く周知が図られるよう、積極的な報道をお願いします。		
他のクラブとの関係	同時配付	(場所)	
	同時レク		
担当 (連絡先)	農政部生産振興局畜産振興課 (担当者: 横田、本間) TEL ガヤルイン 011-204-5441 内線 27-791、27-783		

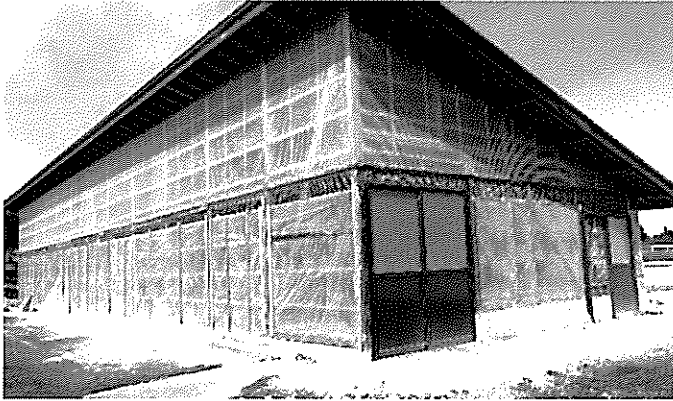
全集中 予防の呼吸

別紙 1

～消毒強化キャンペーン（12月～5月）～

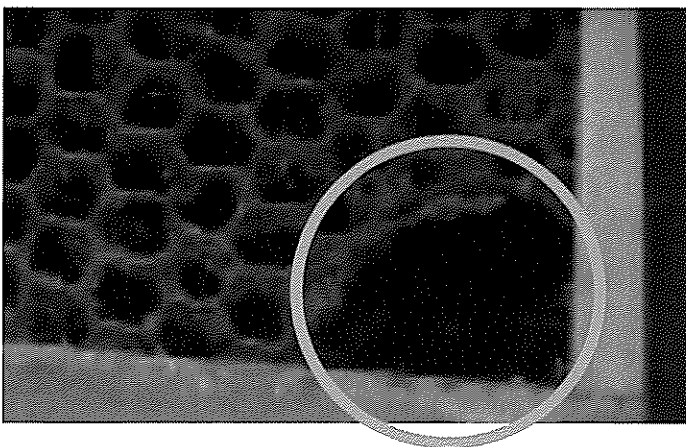
- 高病原性鳥インフルエンザは、養鶏業に最も被害をもたらす病気のひとつであり、感染するとその多くが死んでしまいます。
- 発生すると、農場はもとより地域経済にも大きな影響を与えるため、予防対策を徹底しましょう。

【壺の型】消毒（消石灰を撒け）



消石灰を撒き、タイヤに噴霧し、消毒を徹底！

【武の型】侵入防止（穴をふさげ）



穴を修繕、侵入防止網の設置で野生動物の侵入を防止！

後始末より未然防止の精神



北海道 【家畜衛生に関すること】

【生産振興に関すること】

家畜衛生担当：横田、本間

食肉鶏卵担当 余川、福井

農政部畜産振興課

TEL：011-204-5441（直通）

TEL：011-204-5439（直通）

香川県の高病原性鳥インフルエンザの続発状況を踏まえた
緊急提言

令和2年11月24日
家畜衛生部会
家きん疾病小委員会

- 1 過去の海外の事例では、限定されたエリアにおける短期間での続発について、多くの渡り鳥の飛来のほか、人、機材、車両等による農場間の伝播、長期間の防疫措置による環境中のウイルス量の増加等の様々な要因により、発生した可能性がある旨が報告されている。
- 2 今回の香川県での続発事例においても、これまでの疫学調査チームの現地調査により小型野生動物の侵入、人・物等の疫学関連による伝播の可能性が指摘されているほか、環境的な要因として、ため池等の地理的状況から、野鳥の集団が持ち込んだウイルスの量が環境中で高まっていること、また、養鶏密集地域において環境中のウイルス量が増大していったこと等が想定される。
- 3 以上を踏まえれば、香川県における3～8例目は、1例目の発生農場を中心に半径3kmの区域に設定された移動制限区域内で発生しており、移動制限区域内ではウイルス量が増大していることを念頭に行動することが重要である。
- 4 具体的には、①農場における早期通報、②家きん舎壁の隙間を塞ぐ等の小型野生動物の侵入防止、③家きん舎ごとの手袋及び長靴の交換等の飼養衛生管理の徹底、④畜舎周りの消毒、⑤関連事業者も協力して行う資材・機材消毒並びに⑥地域における車両消毒、ため池周辺や発生農場周囲の主要道路等の消毒、野鳥対策等についての地域の関係者が一体となった取組を徹底して行うことが必要である。
- 5 また、防疫措置についても、防疫指針に基づいて、焼埋却、消毒等の措置を迅速かつ確実に実行していくことが必要である。
- 6 一刻も早く防疫措置を完了し、続発を防ぐために、4及び5について国、県、市町村及び養鶏業者だけでなく、関連事業者、地域住民が一体となった取組を実施することを提言する。
- 7 また、今後の疫学調査の中で、侵入及び感染拡大要因について情報収集・検証を進め、防疫対策に活用していくことが重要である。
- 8 なお、今シーズンの高病原性鳥インフルエンザについては、海外でも発生が続き、国内の野鳥でも相次いでウイルスが確認されていることから、全国的にも、例年よりも感染リスクが高い状況にあることを意識し、引き続き、飼養衛生管理を徹底し、更なる警戒に努める必要がある。